

# 友 林 蘇 岐

## 目 次

小川事業區に於ける伐木 運材事業概況……………長谷川 毅	赤い夕日の瀧洲より旭光	朝鮮林學愚談……………山下不二三
燦然たる校友諸君へ……………七宮 純雄	盛夏漫筆……………井出 進	雜感……………都竹武次郎
林業講習會に出席して……………立道 乙松	苗圃日誌……………二年 今井 一	彙 報……………
學校日誌……………	會員消息……………	領收金報告……………
編輯便り……………		

### ○小川事業區に於ける 伐木運材事業概況(續き)

長谷川 毅

(五)作業功程  
昨年度小川御料林に於て實行せられた成績の大略を記して見れば左の通である。

- 1、作業地 小川事業區宇白川澤皆伐地
- 2、集材面積 十七町四段三畝
- 3、地形 平均勾配十五度
- 4、集材功程表

機 械 名	据付 位置		材 積	集材 回数	全上 平均 材積	主索 張替 數	平均 距離	集 材 期 間
	A	B						
米 國 式	A	B	九、八七四八	一、八五五	六三三	一五	一、〇〇〇	自六月十九日
網 島 式	A	C	一六、八二四六三	一、九一七	八七七	一五	七〇〇	自七月二十日
計			四、〇八二五三	七七一	五二六	六	六〇〇	自十一月十七日
			一八、四三五四二	二、九七七	六一九	五	八〇〇	自十一月廿八日
			四九、二七〇〇六	七、二七〇	六七七	四二		自十二月四日

備考  
米國式とは前説のリジャーウッド會社製造の集材機で、網島式とあるは網島林學士の立案製造にならぬもので、當事業所に於ては米國集材機を購入の後更に此網島式を購入したので、昨年は此二個の集材機で全事業地の集材事業を實行したのである。

(六)其得、利、點  
辛木技師は集材機に就ての説明書の緒言に於て「元來地勢林相ニ於テ日本トハ著シキ差アル米園ニ於テ通信ノミニヨリ稍々小規模ニ製作セシメ初メテ應用シタモノデアラカラ尙數年後ニ非ラザレバ、其眞價ヲ知り能ハズト雖モ云々」と述、たのである様に本作業法が最も進んだ機械的作業の一であるとは云へ、創業以來僅か、二箇年の實行に過ぎない——云はゞ試験の時期にあるのであるから、總ての點に於て舊來の運材

法に比し優れて居り又得利であるといふ事は、一概に斷定し能はぬのであるが私達の實地作業に従事した其結果から考へて見て最も利益として誇るに足るものは主として左記事項である。

- (一)長材若しくは大材殊に貴重材の集材に利益なること
- (二)全木材に及ぼす運材の損傷を著しく

減じ得ること

(三)労働者の僅か且固定的なるが故に労働者の拂底の爲に生ずる支障の無きこと

(四)天候の晴雨如何に關せず作業し得らるること

(一)の利益點たる長大材及び貴重材の集材に利益なることは只單に經濟上に於ける利益である許でなく、舊來の運材法に於ては餘程の經費と努力とを犠牲にしても長木材の搬出は厄介扱にされたもので斯る需要に應ずる事の出來ぬ不合理の運材法に比して遙かに其間接の利益が多いのである

(二)の全木材の損傷を著しく少なからしむると云ふことは今更喋々たるを要しないのであるが、是が爲に木材の品位即ち市場に於ける木材價格の等級を非常に優良ならしめ、森林經濟上多大の利益を收むることが出来るのである

(三)の労働者の不足の場合に於て不安の起らぬ事由は、本機に従事して居る労働者が極く僅數で然かも善く順馴されたものであるが故に、労働者が足らぬ爲に事業が出來ぬとか、或は作業の進行を阻止するとかいふ様なことのないからである。其労働者の人員を記せば次の様である。

- 指導夫 一人
- 運轉夫 二人
- 火夫 二人
- 號信夫 一人(若しくは二人)

- 木登夫 一人
- 集材夫 八人
- 雜役夫 一人
- 計 十六人

(四)天候の晴雨に關せず作業し得ることは、事業の進捗上最も肝要の事で又一方労働者の立場から考へて見ても休業日の少い爲に收入の多く得らるること、なるのである

(七)結論  
以上は其主眼點に過ぎないのであるが、是を概括的に昨年の事業成績の上から考へ見て、全事業に於て如何なる點に於て得られたか、又經濟上幾何の利益があつたか云ふに、前記四主眼の利益點を大いに發現し得た結果として、第一に豫定の計畫通り全事業(集材事業を指す)を本作業法に於て搬出することが出來、第二には全木材の損傷を非常に少なからしめ、第三には前記に述べた如く運材法の進歩が造材法を改良せしむる當然の結果として本作業の實施の好影響が從來未だ一度も實行せられなかつた續材を造材し搬出し得たことである、續材と云ふと一寸妙な言葉に思はる、かも知れぬが、從來の二間材(長さ十五尺五寸)の造成を主眼とした方法を改めて出來得る限り、材質並に木材の曲り等に應じて此二間材二本に相應した長さ即ち三十一尺の長さにして長記號としては末二間と元二間との直徑を別に現してある。是を續材と稱し昨年始めて實施されたのである。尤も木材

上の空論ではない。

尙又他區と異つて居る點として最近進歩したことは、人夫賃金の抱拂(一日一人に付支拂ふ方法)から出來高拂(行程拂とも云ひ其作業高に應じて賃金を支拂ふ方法、但し請負事業とは全然異なる)に一變した事で、現在では大部分此出來高拂の人夫である。是は經濟上から云つても又人夫の收入の點から考へて見ても、非常な利益であつて、眞に一舉兩得と云つて善いであらう。然し、出來高拂の實行に就ては私は左の條件を要すること、思ふ

- 第一出來高拂を實行する事に依て作業高を増進し得ること
- 第二作業高の數字上に現れ得ること
- 第三作業實行の成績が判明し得ること

第一及第二は云ふまでもない事であるが、第三はさう云ふ事だと云ふに、例へば或作業を出來高に依り實行した結果が果して完全に遂行し得られて居るか、さうか判然と分明し得ることが必要である、と云ふことである。

又當區に於ける人夫の待遇に就て、將來如何なる計畫があるかと云ふに、前記の通り實施的人夫並に永久的居住の人夫が逐年増加するのであるから、是等の人夫が安全に又幸福に生活し得らるると云ふ爲に特に一定の居住地及住宅を設け其周圍若しくは近くには田園地尙進んで小學校郵便局位の教育並に交通機關を設けると云ふ立案がある

其物より見れば普通の長材であつて續材なる名稱は方便上の名前であるのである。而して經濟上幾何の利益があるかは、唯單に支出經費の多少のみを以て論ずることの不可なること勿論であるが、其直接經費は舊來法と大差はないが其間接の利益たる木材の損傷を少からしめた爲に生ずる木材の品質の優良即ち市場價格等級の優良並に續材を造成し得た爲に得る収益等を總和して勘定したならば、其利益の相當收得することの出來るのは論を俟たずして明然たる事である。殊に續材は長間材たるか爲に多少の品位が下つても(是は長材となれば曲り並に節のある面が増加して來る爲に品位が下るのであつて材質上から起る爲ではない)其單價額は二間材より八割余の増加があるのであるから市場の需要の増加に依ては莫大の利益を得ること、信せらるのである。以上を以て集材機作業の概要を盡したのであるが前にも申上げた通り詳しき内容に就ては小川御料地に行つて實地作業に付充分視察して戴くことをお進めするのである。

四、人夫の状況

交通運輸の便益なることに就ては前説に於て屢々述べたのであつたが、是は唯に事業其物の經濟上に及ぼした關係のみならず、終日熱汗を絞つて孜々忽々として撓ゆまず労働に従事して居る處の一般人夫にも非常なる便利と幸福を齎したものである。斯る事情から當區に於ける世帯持の人夫は近年

るのであるから、其實現の曉に於ては現在及び將來の人夫も此文化的林業の恩澤に浴すること幾何多いのであるか、其時期は問題外とするも何れ伐木運材事業の進歩發展と相俟て近き將來に於て必ずや現實すること、信するのである。

赤い夕日の滿洲より

旭光燦然たる校友諸君へ

七宮純雄

野生が渡滿してからまだ三年にはならぬ足跡を印した地としては借王々吉林から松花江上流々域の一帶と哈爾濱から東支線程稜に至る間並に鴨綠江上流の一小部分に過ぎない就中比較的多く歩いたのは松花江上流で前後二回之に費した日數約百五十日歩いた里數を積算して見ると約六千支里(日本里にて約六百里)其間或は未明に牡丹嶺を越え或は白頭山麓奇怪至極の鮮人部落に入り込み或は馬賊の巢窟と稱せらる、濛江を擄猛なる馬賊の歸順兵僅かに六名を連

著しく増加し又今后も倍々激増さる、一方又當區の他に異つて獨特なことは年々事業の休止したことがないこと云ふ點である(尤も全部の事業が繼續する譯ではないが)それであるから當區の人夫小屋に殆んど永久的固定的に家族を養つて生活する様になつた人夫が年々増加する許である。尙當區の特殊な點は前説「運材第一」で述べた様に漸次舊來の伐木運材法が機械的に變遷して行く爲に是に従事して居る人夫も此變遷に伴て、其労働が機械的に變つて行く傾向のあることで、前記の集材機人夫を始め森林鐵道、作業軌道等に從事して居る人夫は他區の伐木所の人夫とは餘程異つて居るのである。是は時勢の進歩の然らしめたる結果で、人力的技術を要する作業が消滅して漸次機械的技術を要する作業が次第に進展して來た事實が現れたのであつて、又一般労働者たる人夫から考へて見ても大なる幸運と云つてよからう。なんと云へば、人力的技術と云ふ事は、幼時より習慣的に或一個の専門作業を習練したものでなければ上達することは出來ぬのであるが、機械的技術は是に反して僅か一二箇年位の中に充分熟達し得らるものであるが故に、或一個の作業に従事して居る中途に於て其作業が休業となつた處で其事業區に他の一個の機械的作業があれば其作業に轉業すること出來ると云ふ譯である。是も實際上私達の輕験し得られたことであるから決して機

友 林 蘇 岐

れて跋渉したなど内地にありて安穩に起居せらる、諸君には到底豫想が出来ない様なことを實地に見聞して来ては居るが何にせ此曠莫たる地以上の通り日數に於ても踏み得た範圍に於ても頗る微々たるもので全く國上僅に一点若しくは一短線を畫いたに過ぎぬを以て茲に鳥辭しくも將た大膽にも敢て秃筆を呵するに至つた所以は唯に一日の長たると今や校友諸君は内外各地に散在し時折林友紙上に其消息並に其地の状況などを發表されて居るので大抵の土地の概況は解つて居られる様だが此滿洲方面は岐に御縁が薄い様な気がするのと、渡滿以來可なり多くの校友諸君から色々な御希望と共に當地の事情など照會せられて居る勿論其都度努めて御答はして居る筈ではあるが中には何處かに紛れ込んで其儘になつて居るのや或は手紙だけでは簡に失して要領を得なかつたものもあるかも知れぬ依つて此際夫等諸君に對して御申譯旁々改めて御回答に代へたい爲とある次に之は無聊に苦しんで居る際折よくも親愛なる諸君の來訪に接し「マアゆつくりし給へどお互浴衣で胡坐し冷麥酒を酌みながら打ちくつろいで順序も絲瓜もあつたものでない脳裡に浮んだ儘勝手に喋り散らす氣分を書き下したに過ぎぬから前以つて御斷りして置く。

と云ふと支那の人口程不確で當てにならぬものはないが此頃の新聞で見ると最近支那續行委辦會が英米煙公司や美孚亞細亞石油公司の贊助を得て調査し最も正確に近いものとして發表したものであると支那全体の人口が三億六千三百三十万人此内滿洲の人口百九十五万人だから丁度上海のと同じ位だとして居るが其境界が明瞭してない其説も國々で一定してない尤も其判然たる區別の必要がないかも知れぬ併しよく用ひられて居る語であるから大凡その見當だけ示して置かうと思ふ通俗ではあるが長春と吉林とを結び付けた線を界として以北を北滿以南を南滿だと言ふのがある歴史或は地理的の見地から論じて見ると余り感心せぬが現に吾南滿鐵道の終点は長春だから「マア其位の處でもよからうけれどもさうすると界になつて居る長春や吉林は南滿か北滿かと云ふことになるそれは南滿でもあり北滿でもあり又北滿でもなければ南滿でもない」と云ふより仕方がない、からあたりは先づ支那式だと言つて逃げて置かうそれから一般に鴨綠江流域から伐り出される材は鴨綠江流域若しくは南滿材、吉林上流の松花江流域より伐り出される材は吉林材東支沿線から伐り出される材が哈爾濱材若しくは北滿材と稱せられて居る。

が人家附近などに点々して居るに過ぬぎ農耕地は所謂大農的で何んでも話に聞くと畦の長さ一里以上のものがいくらかもあるさうな牛馬耕して下種する丈けらしい主要作物は大豆、高粱、粟、唐モロコシの類であるは秋期收穫後は全く曠莫たる平原だが此作物の盛んに生長する夏期には僅に七八尺より一丈余にも達し一の密林の形をなす之が自然匪賊の活動に便ならしめるから此期には山奥より却つて人里近くに彼等の跳梁被害が多い。

松花江上流でも鴨綠江上流でも山嶺水平なる山形が多い而して此山嶺まで登るには中々急峻である愈々上つて見ると矢張曠莫たる高原である之は何んでも古期岩層が多たる風化崩滅の爲め一旦は波狀小丘となつたがその凹凸は第三期の終りに噴出せる新期熔岩の爲めに殆んど同高に充填せられ其縁邊のみ削剝作用の進むに従つて次第に陥落してこんなテーブルランドを形作つたものなさうなそれで飛行機にでも乗つて此邊を飛び廻つて見たならば丁度砂を平らに盛つて處々其上に水を流した様に見えるだらうと思はれるそれ故水源地附近は岸も低く全く何等風情もないが漸次下ると斷崖絶壁所謂南滿風の景色も處々に見られる又單に地圖から見ると或る流域にて伐木した木材を分水嶺を越して他の川により流下すること非常に至難の様に見えるが事實に於てそんな上り下りなく平坦地を運ぶだけで案外

友 林 蘇 岐

樂な場合がある現に松花江流域の木材を鴨綠江流域に運んだ實例もある。

滿洲に於ける樹種は極めて少ない伐木業者の主目的は果松別名紅松(朝鮮五葉松)と杉松(朝鮮樅)とである望花松(落葉松)赤柏松(一位)も少しはある魚鱗松(唐檜)沙松(ハリモミ)臭松(白檜)なども概して魚鱗松、沙松、臭松は杉松と一括され取引上には單にシロ之に對して果松をアカと稱せられて居る一般にシロはアカより約二割方値段が安い調葉樹としては、しなのき、にれ、なら、やらだも、楊柳類、樺類、かへで類、きはだ、くるみなどに過ぎぬ望花松を落葉松としてはあるが内地の落葉松と同一物でないらしい果松杉松でも南滿のものど北滿のものど違ふと言つて居る者もある處變れば品變るで毛が一本足らぬとか穴が一つ多いとか云ふ様なことは宜しく其道の専門家に御願するとして吾々前垂れ伊には孰れにしても大した差違がないらしいから似寄つた通り各の和名で話を簡易にして置く滿洲には平坦なる低濕地が處々にある之を甸子と稱す此甸子にはよく落葉松の純林が成立して居る之を董花松甸子と呼んで居るそれから此地方では平氣で山林を焼き拂ひ其跡地に粗放な農業を營んで居るから可なり大面積の白樺の純林を見るが之を林業方面から見ると慘害の跡で眉を蹙むべきではあるが此純白なる雪景は殺風景な曠野に一段の趣を副へ寧ろ神々しさを感ずる程である。

一体吾人は滿洲の史的智識は頗る乏しい先づ滿洲なる語の頭に這入つたのは愛親覺羅氏が滿洲から起つて時の北京政府を乗り取り清朝として支那四百余州を支配する様になつたと云ふのか抑もの始まりで次に朝鮮問題が因をなし所謂日清談判破裂して品川乗り出す吾妻艦と云つた段取りで兩國干戈を交ゆることになつたが眠れる獅子として恐れられて居た流石老大清國も日章旗の前に日光を浴びたもぐら同様連戦連敗と云ふやつと梟が付いたも望梁一炊の夢露獨佛三國抗議の結果吾國は血涙を呑んで其利權を放棄した之で滿洲なるものが稍や深く吾人の腦裡に刻まれて來た處が其發頭者なる露國が舌根未だ乾かざるに李鴻章をペテルブルグの戴冠式に引張出し不届千萬なる同盟條約を結んで滿洲を我物顔に振舞つた之が赤い夕日の滿洲と云ふ軍歌や鷲の住むてふ滿洲といふ琵琶歌などを産み出して一段と深刻になつて來た近來は滿鐵問題や阿片問題で一層其名が廣まつて居るのかも知れぬ此際嘗て十年の役に蓋世の英傑南洲と共に叛旗を翻したが戦利あらず遂に討死した快漢篠原國幹が精神込めた征韓論が否決されたので燒糞半分に詠した詩を想ひ出さずには居れぬ。

飲馬綠江果何日 一朝事去壯圖差  
此間誰解英雄恨 袖手春風詠落花

赫山の名所、砂防工事の標本等いふ難有からざる名を以て天下に著名なる我が朝鮮十三道の山林が新政以來幾分復舊して來たが、尙復舊しない所多く、不相變赫山の名所として其の名を天下にはいまい、にして其の原因は種々あるであらうが、私渡鮮以來二年有余の觀察に依れば、先づ左の様な諸点に依る事と信ずる。

素より下級の林業技術者て天下國家を論ずる譯ではないが、内地の諸兄に朝鮮林業の一斑でも紹介するを得ば幸甚の至である

其の 一

先づ第一として擧げたいのは朝鮮人に計劃といふものがないことである。昔時より支那と日本との間に介在して、兩方から不絶困しめられて居つたから無理もないであらうが、朝鮮民衆の殆んど全部が目前の利にのみ吸々として、何等永遠の計劃といふものがない、之が最も大なる原因である、



○朝鮮林業愚談

山下不二三

友 林 蘇 岐

昔時李王朝の虐政や、今尙文化の程度の著しく低いなどは又之が間接の原因をなして居るのである。

其の二

元來朝鮮は山國である、林野の面積は全面積の七割以上を占めて居る。こうした山國であるが悲しい哉地形質氣候等の、先天的原因に依り、非常に困難な立場にあるのである。朝鮮の山は地表が著しくやせて居る、母岩の風化作用は、内地は一年に一寸内外だといふが、我が朝鮮に於ては六寸以上に達する。従つて非常に蒸發し易い、降雨量も尙く又一時に多量の降雨があつて殆んど一年中快晴を續ける。毎年特に本年は漢江が氾濫して、京城の竜山が、半分埋つた事等、京釜線が四十哩に亘つて破壊された事等、新聞紙上に依つて承知されて居られる事であらふ。

其の三

内地では、林業は百年の大計、獨乙では六十年の計といふが、我が朝鮮では「林業は十年の計」といふ。従つて十年内外に達すれば、針葉樹といわず、闊葉樹といわずどしどし切つてしまふ、爲に高齡樹等は絶對にないといつてもよい。そして伐採跡地には造林しない。

其の四

我々が植林の奨励をする時の對話を、次に書いて見やう。

るし、又昨秋切つた所がわりますから何か植えませんか、苗木は共同購入で役所の方で御世話しますし、又植むる時には、私が来て人夫を指揮してあげますから」

相手「コーマガツニダー（ありがどう御座いますの意）然し山はほつとけば、自然と松が、生えますから、何も金を投じて植むる必要なんかありません、失禮ですが御断りします」

私「然しほつといつても一本や二本の樹は生ねるでせうが植むた樹は第一揃つて居りますし又素生がよいですよ、植むる時は一時金を投じて惜しい様な氣がしませうが、十年二十年と後々になれば楽しみなものですよ」

相手「分りました、それは分りましたが折角植むても泥棒に盗まれるし、それに松蠹蝨もつけば、火もつく、一番恐しいのは虎やヌクテ（豺狼）が殖むて来て仕方がないからマア止めませう。大体十年この方いくらか山がよくなつた爲虎やヌクテが殖むて来て困ります、又役所の苗木を買つて商人や役所の金儲けをさしても、つまりませんか」

私「それでは仕方ありません、然しもう一度御考へ下さい、さよなら」

途も遠慮なる哉である。

其の五

朝鮮の山には山林税がない。又樹が少くない、それに多くは未だ所有權が確定して居ない、又後で述べるが朝鮮では、林地が從物で、林木が主物の感を生じて居る、爲に非常に山の値段が安い、従つて山に對する經濟的感念が、非常に薄い。

其の六

其六のは温突である、朝鮮の冬は寒い、寒いと云ふよりむしろ痛いといふ方が適切であらう。零下十何度近く下る、従て不經濟な温突を全廢せよといふのは無理な注文であるが、代用薪炭の粗がらを焚くとか、草を焚くとかしなければ、とても駄目である。それは非常に焚く、田舎等へ行けば、一年中焚く、一日中温突専門の奴があつて暑くて暑くて座に堪へない位よく焚くので、せめて温い程度に焚くとか又は夏は全然焚かない様にしたいものである。朝鮮全道に亘つて、此の温突に焚く燃料は驚くべき巨額に達するのであらふ、極く貧窮者に至つては、食物を節つしても焚かなければ、堪へられないといふ有様である。

其の七

前にも一寸述べたが、大体朝鮮程、林野の所有權の不明な國はなからふ、昔は封山と公山とあつて、封山とは王公の墓地のある所とか、要するに内地の要存置國有林の如きものである、公山とはそれ以外の山で鴻縁江附近を除いて、大抵赤松の單純林である。その上氣候が非常に乾燥するから松蠹蝨の發生、蕃殖には理想的である、此の虫の猖獗を極めて居るのは實に豫想外であつて、私等も先般奮勵して數百石を取らせ、然し中々人力では追付かない、混交林を造成するより外、仕方がない。

其の十二

次は經費の關係である、内地に居る爲政者や民衆の朝鮮の状況を知らず朝鮮を理解して居らないのは豫想外である。帝國の存在上朝鮮と云ふところは非常に重大な位置にある。その朝鮮は産業漸く其の緒につき發展するのは是からである、然るに内地の爲政者らは朝鮮と内地と殆ど同視して居る様である、從て補給金を貰ふにもたつた一千萬圓や二千萬圓の補給金を貰ふのに、總督府當局と大藏省當局とまるで喧嘩である、今度行政整理をするにしても内地と一律にやりはせんであらうが、大体朝鮮等は或る一部を除いて整理の余地等は全然無いと思ふ、殊に産業の方面に至つては、全然ないと思つてもよからう、確固不動な産業計畫もなく毎年僅かな補給金を貰ふに喧嘩して居る様では、到底前途暗澹として居て見込みがつかぬ、特に永遠なる計畫を必要とし一般産業の原動力の位置にあり且朝鮮現在の山林を合理的に經營せしむるのには殊に駄目なりと思ふ。

須く確固不動なる計畫を樹て此計畫に向

友 林 蘇 岐

あつて、山野の所有占有は昔は禁せられ、万人の共有物であつたのである、材木や薪がなくなれば、誰でもその公山へ行つて、切つて来る、だから愛林思想等は全然ないのである、従つて荒廢する筈である、新政以來此の制は破れ、だんだん世の中か世智辛くなつた爲、所有を主張する者が多くなつたが、尙舊制の遺風があつて、今尙この共產的思想を以て山に對して居るものが多し。總督府は朝鮮林野調査會を發布し、林野の調査を行ひ國有、私有の區分をやつて居るから、此の点は遠からず、救はれるであらふ。

其の八

前にも一寸述べたが實に奇抜な事がある内地では誰でも林地を主物とし林木を從物と見て疑はないが、我が朝鮮にあつては、これが反對である、即ち林木が主物で、林地が從物の感を生じて居る。山の木を買買するといへば、林地も従つていはず語らずの内に賣買されて居るのである。爲に一度山を買つて斫伐した跡地には樹を植へない筈である。

其の九

次は墓地である、大体朝鮮人は非常に墓地を尊重し、墓地を崇敬するのは敢て朝鮮人ばかりではなく、洋の東西を問はず同じであるが、朝鮮人は格別である。そして其の墓地は皆山に設けられる。最近墓地取締規則が變つて、勝手に山に葬る事が出来なく

なつたが、然し今でも密に共同墓地に葬らずに、勝手に葬るものがある。一度葬つてしまへば、改葬する等といふ事は中々出来るものでない。京城附近の山々は例の饅頭で、累々として密集し、初めて見るものは何たか、見當がつかぬ位である、私の研究に依れば、この墓地の適地が中々ないやうである、何でも相當な谷の一番上で水をながれ、兩方から山の尾が差し出て居る處が一番といふことである。こゝが中々なくてこんな適地は千圓、二千圓といふ高價で賣買される、如何に墓地を崇敬するかが想像されるであらふ、餘談に及らるが世界中、火葬、水葬、土葬の三通と思つて居たら、朝鮮には風葬といふ奴がある、風葬とは、死骸を山の樹の枝に吊して置くのである。

其の十

朝鮮人は長いキセルで葉を喫ふ、身分が高い程キセルが長くて、長いものになると、三尺以上ある、さてこのキセルがよくないのである、人にマッチで火をつけて貰はない限り、キセルをくわへて居て葉に火を付する事は出来ないから、山等では、草に火をつけてからキセルに火を移し、そのまゝ、消さずに行つてしまふ、之が多くの火災の原因をなして居る。京畿道の如きも毎年の人工植栽面積と山火被害面積と同じださうで、實際困つたものである。

其の十一

次は松蠹蝨である、朝鮮の山は北鮮地方

つてあらゆる障害を除いて猛進する様にせねばならぬと思ふ。

其の十三

その外原因は無限ない或は内地人が入つて来てから根炭を焼くことなどの悪風を教へる文化の進展に伴つて木材の需要が多くなつたことや、交通機關が發達して木材の運搬に便になつた事や指を屈すれば枚舉に暇ないがまづこの位で擱筆して他日に譲らう。

要するに朝鮮林業界の前途は遠慮である洋々たるものである、我等選まれたる者は倦まず屈せず氣長くこの愛する朝鮮の山々や民衆の爲めに働かねばならぬ、今や内地も行きづまつた様である、日本男兒たる者いつまでも戀々として故郷に躊躇して居るのは其の名に耻するであらう、來れ！朝鮮の山々は諸君の名技を待つて居る（了）



○雜 感

都竹武次郎

一、専攻の必要

吾々が母校をあとにしてから、實社會に出で、親しく實務に執筆するに當つて、痛感する事は、自身に蘊蓄の足りない点である。勿論學理と實際とは多少の徑庭があるうけれども、斯くまでに自分達が修得した所謂「専門智識」が皮肉に裏切られ、判斷

に權威がないのには、全く以て恐入る。

この事は、他の専門發育——譬へば電氣とか建築とか——を受けた、同輩の智識や判斷に比する時、特に鮮かなやうな氣がする、而して此の歎が、單に吾々だけの考へかど疑つて見たが、一般高い教育を経た人々の間にも同様相似た慨歎を屢々聞くに及んで、是は單に我中學教育程度に止らず、最高學府にまでも通じた「林學上のサムシング」ではあるまいか、と思ふのである。社會へ出て、専門技術者として、他の技術者に伍して處するには、あまりに林學の知見は所謂専門智識として、廣汎雜駁な感がある。從て官場民間に於て遇するにも、毎時他の専門技術者の下風に立たせられ、往々無理解な幹部に、可惜企畫が一顧だに與へられぬ事もある。畢竟技術に權威が少いからであらう。で、是は今少しく林學も分科的に攻究する必要を、暗示するのではあるまいか。

自分達自身が見ても、専門らしい（第三者の一寸窺知しがたい意味に於て）のは、森林經理學一科のやうにしか思はれぬ。若し夫れ分科的に専攻する事になれば、森林土木に、森林化學に、工藝利用に、森林經濟に、實に多岐多端なものである。要するに、現在の林業教育を受けたものに、今一段の見識を具備せしむるには、一般林業教育の爲に、各人に何か一つづつ、を分科的に専攻せしむる必要があると思ふ。

（農學でも工學でも大抵分科的に専攻せられて居るのに、林學だけは單科である）殊に營利會社などに入り、技能を唯一の武器となし、精銳犀利な他の技術者と、轡を並べて戦闘に立つ人達は一入の事であらう、小生は事毎にこの感を深うするので、敢てこの所感を高唱するのである。

二、昇格問題

頃日北信在任の蘇門會員諸君が、會合の席上、談偶、母校の昇格問題に及び、忽ち期成同盟の案成り、徹を飛ばし小生も發起者の一名に推されたが、不幸小生は諸君と見解を異にし、昇格を喜ばぬ一人である、本曾山林學校が、本邦唯一の山林専門校として創立せられたに付ては、相當の使命と抱負を有し、それに過去二十年の光輝ある歴史もある、極端に云へば昇格といふ事は、母校の更生であり、それと同時に、内容形式とも一變じ、光榮ある母校は先づ葬らるゝやうなものだ。嘗て東北大學の某専門部が、大學に昇格されやうとした時同部の教授學生は、光榮ある部の歴史と特色とを重んじ、團結して極力これに反對した事實がある。少くも學校の心ある士には、これだけの意氣があつて欲しい。

這是決して頑固でも偏見でもなく、まことに見上げた精神で、そこに美しい東北氣風の清澄掬すべきものがあるではないか。這般高師其他の昇格騒ぎの際、大毎社説は實にわが意を得たものかあつたから、左

に抄録する。

〔上略〕専門學校にはそれ／＼特種の目的と必要があつて存置されたもので此處に來り學ぶものは、専門學校なるが故に入學したものである事は勿論である。故に嚴格に云へば、若し政府が専門學校を他種の學校に變更せようとするれば、昇格であらうと何んであらうと、學生等は異議を云ふべき十分の理由を會して居る。從て吾等は政府が大學の必要があれば別に大學を設け、既設の専門學校は専門學校として在置すべきである（下略）

當時某高師の學生全員五百余名が、大學しで上京するなど、これが將來の中學教員であるから恐れ入る、揚句の果に教授總辭職學生總退學を宣し、程經て口を拭つて出勤登校と來ては悲痛なる滑稽を通り越して、八百長の駈引に墮し、態度まことに唾來すべきものがあるではないか。

寧ろ小生は、前項の力説にかんがみ、既の上伊那農學校には實施されたとかの、研究科の設置を切望する。規程三ヶ年の後向一ヶ年乃至二ヶ年を以て専攻學科の討究と實地見學（實習學生となるもよし）とにより専攻智識を涵養したならば、社會に出づる日の羽翼聊か成らんか。

三、新しもの流行

近頃は目まぐるしい程流行が變轉する、願れば小生共が母校に居た頃は、杜翁がすんでオイケン、ベルグン物が讀まれた、

暫らくして森の詩人タゴールでなければ夜も明けなかつた。それからマルクス、クロポトキン、凭うした名を數へるだけでも七面倒な舶來ものが走馬燈の如く來往し、小生共はどの一つも噛ちり得ず、今日に到つて居る當局が目を光らして危んだが、何一つこの國には不粹事も仕出來さず、大正も十一年度だ。由來わが國民は新しもの喰ひである、丁度春刻花に戯る蝶兒の如く、次から次へと花を追ひ、風に任せて轉々してやまぬ、一頭猫も杓子も改造々々で大騒ぎしたが、たゞ漠然改造を絶叫するに過ぎずして、その改造すべき現状さへ究めず、徒らに聲を大にするのみ努めたのは、愚な事であつた。

社會的宣傳事項にも「節米」や「代用食」の唱へられたのは一昨々大正八年頃の事であつた。それもあまり徹底しない間に「文化生活」と「社會奉仕」などが踵を接して高調せられ、その間細かに考へると随分相容れぬ主張が、平然同一國民に迎へられて居る。それもよしとして今度は「節約」に早變りした、凭ふ目まぐるしくやつて來られては、實際送迎に忙殺される、而かも時は惟れ「交通安全」のほどばかりが、未だ冷へ切らぬ内ぢやないか。

斯様に社會の先覺が、無反省に次から次への宣傳は、宛然衣服や調度の流行と何等撰ぶところがない、さて、輕兆浮華な塵民である、随分安つばく見くびられた民衆

である、少しく重厚堅實省察に富んだ國民になつて欲しいものである。

四、憶 斷

近頃の新聞雜誌類を通じて、著しい傾向はローマンス風の讀み物の多い事だ、總じてそれらの記事は、何かの事件のある毎にこれにまつはる第三者の憶斷し主として半端聞きなごのからして誇大的に報道せられ事實の真相に觸れてゐず、それらの筆先にか、つて、大抵の人事は品隠されてしまふ取消や釋明などなし得る途はあつてもそれは既に曩の憶斷的記述が讀者の腦裡に烙記せられた後の祭り何の効もない、かくして社會的冤罪に陥れる人達は少からぬのである。特に婦人雜誌の類には時々の世の視聽を惹く家庭的事件のいきさつを、この憶斷半分の批判が麗々しく掲げられそれが又呼物となつて賣れて行くのである。讀者は讀者で、これが又彼等の憶斷の火に油を澆いた如く、更にこれを語り合ひ、かくして社會全体を通じて無省察が跋扈するのである。

この傾向は前項とともに、改めてほしい事の一つである。

人が社會的に疎くのはその人によつて幾分の死である。然るに自分の仲間が死の平によつて脅かされて居る時、人々はその周圍にあつて沈然の禮儀すら守らうとはしないのだ（有島武郎）

大正十一年八月八日記

（完）



○盛夏漫筆  
井出 進

(一)  
人は環境に支配されると云ふことはよく  
きくことだが、今しみじみ自分を感じ  
て居る、今迄比較的到老成した様な気分  
で生きて来た自分が去年から自分よりもず  
つと若い人達ばかりのグループの中に這入  
つて生活して居るとその話すこと聞くこと  
がすこぶ若々しいことばかりなので、  
つひ自分も知らず／＼の間にその若々しい  
気分と同化されてしまふ、休みに家へ歸つ  
て来たりするとみんなから「若くなつた！」  
などと云はれるのも無理もない事だ。  
「郷に入つては郷に云へ」と云ふ諺がある  
が敢て従はうとしないことも、自然にさうな  
つてしまふ、つまりその環境に支配されて  
しまふ譯だ。

(二)  
人は病氣になつた時はほんたうに敬虔な  
嚴肅な心になる。ただその病氣の苦しみが  
ら逃れたい、生きたいと云ふ單純な望みの  
外何者もなくなつてしまふ。壯健で居る時  
の様な諸々の不純な欲望が限りなく湧いて  
來はしない。吾人はいつもこの病氣になつ  
た時の様な純なひとすぢな敬虔な聖化され  
た心を持つて生きて行かれたらどんなにか  
靜平なことであらう。

(三)  
耻を知るといふことは美しい事だ、私は  
所謂鐵面皮などんことをしても何とも思  
はないといふ様な神経の鈍い無耻な種類の  
人を見ると余り好ましく思はれない。耻を  
知る人は自分の爲した種々の出来事に對し  
よく内省しその責任を感じる人だ。善を愛  
し美を愛する人だ。今の社會はかうした  
所謂良心の鋭い人が如何に少ない事であら  
う。然しかうした人々に依つてのみ墮落せ  
んとする社會は救はれ、よりよく美しくさ  
れて行くのだと思ふ。

(四)  
眞の教育といふものは、ほんたうに個人  
といふものを理解してそれを善導し、向上  
せしめて行く所にあらねばならぬ。ただ徒  
らに規則だとか何だとかいつて一つの型に  
のみ鑄込まんとするが如きは誤謬の甚だし  
いものだ。「愛は理解から……」と或人はい  
つたが教育は慥かに此處から出發して來な  
ければならぬ。或種の教育者のやる様な一  
種の威壓や干渉は封建時代の遺物だ。そん  
なことは決して教育の効果を奏するわけに  
はいかぬ、却つて反抗や反感を買ふのみだ  
或意味からいへば眞の教育はその教育者の  
全人格の光からでたものでなければならぬ  
(五)  
人間には好嫌愛憎の心がある。然しそれ  
は極めて頼り少ないものだ。或時は非常に  
好きであつたものが或時は非常に嫌になつ

たり、亦ある時は非常に愛したのも一々  
したことから非常に憎んだりする。  
私共は人に對し一時的の感情や一時的の  
氣まぐれによる好嫌愛憎の心をつゝしみた  
と思ふ。

(六)  
「苦しむ」といふことはよいことだと思  
ふ、何故といふにその苦しみがたとへ如何  
なる苦しみであるにしても、ほんたうにそれ  
を身に沈みて味ひその境地を切り抜けて行  
つたならばその人はそれだけ鍛えられたわけ  
であるから……吾人は苦しみに敗れて  
はならぬ。どんな苦しみに、悲しみに逢つて  
もそれに打勝つだけの覺悟と準備が必要の  
ことだ。吾人の住んで居るこの世の中は、  
この苦しみや悲しみなしには生きて行かれ  
ないのだから……それに私の様な平凡な  
人間はこの苦しみや悲しみを透してのみ始  
めて神といふ様なもの、存在を想ふことが  
出来るのだから……。私共は常に如何なる  
苦しみでもそれを甘受するだけの余裕を  
心に持ちたいと思ふ



○林業講習會に  
出席して

立道 乙松

七月廿日より廿七日まで駒場農學部林學  
教室で大日本山林會主催の四回林業講習會  
がありました、私は之に出席し短日月の間



苗圃日誌(一)  
今 井 一

四月廿五日 火曜日 晴后雨

午前九時始業第二號苗圃の一部約三百坪を  
二學年擔當播種實習を行ふ事となる。先づ  
西澤先生より播種に於ての方法や注意があ

に親しく専門の大家の御話を承り非常に得  
る處がありました、今回は甲組と乙組とに  
分れ甲組は三浦博士の製炭法、乙組は西垣  
博士の森林土木學主として林道設計でした  
兩組共講師の方の熱心な御指導には少から  
ず感謝しました、蘇門出身の先輩諸兄も甚  
だ多くありました。長野の金井さん、東京  
の羽田さん、下高井郡の平田さん、島根の  
宮下さん、東京の石原さんと私と六名でし  
た、前記の諸兄には色々御世話様になりま  
したから紙上を借り御禮申し上げます、それ  
から丁度臺灣の北村先生が御上京中で親し  
く御目にかゝり色々臺灣の林學上の面白  
い御話を承りました。先生は頗る健全で五  
年前に御別れ申した時と少しもお變りなく  
又近日中に御歸りの由でした、近中に或  
大事業に御着手の由ひそかに大成功の日を  
御待ち申します。社會に出ますと、恩師の  
方々や先輩の方々に御目にかゝる位楽しい  
事はありません。私はかゝる機會を努めて  
作り度いと思つて居ます。先は校友會諸兄  
の御健全を祈ります。

る、お話を聞いた丈でも仲々面倒なものだ  
もの、是を實際に手を下してやるといふ段に  
なつたら仲々容易な業ではない、やつぱり  
經驗と熟練は必要だ、何しろ是が土臺だか  
ら、是から自分達が是を實施するのだと思  
つたら初めて本校の生徒になつた様な氣が  
した。

(一)播種床作製  
普通巾三尺五寸に切り鐵で兩側を二寸五  
分宛かき上げて床面三尺とする(坪數計  
算上便宜である)

歩道は巾一尺五寸位  
各自擔當箇所設定の爲半坪宛に區畫をし一  
人擔當半坪他に各實習組に於て二坪半乃至  
三坪を分擔す

(二)把碎及地均し  
分擔箇所につき耕起したる土塊を破碎し  
て金篩で礫を除き細かき土粒となし町き  
盤又は足を以て床面を押へ凹凸なき様均  
平にす

四月廿六日 水曜日 晴  
(一)施肥  
人糞を桶に約四分の一を入れ是に三倍の  
水を以て薄める、播種には人糞を最も可  
とすと、薄めたる人糞一桶をよく攪拌し  
略一坪の中に施す(理論上は二坪に施せ  
どか)

次に其上へ薄く土を覆ひ土の落ち付の惡  
い所は板の様なもの軽く押へ然る後種  
を播く



榮 報

○學校日誌

○七月 第一學期試驗終了

十九日 夏季實習開始

廿四日 吉川先生輕井澤へ英語講習會に、  
小貫先生長野へ生理講習會に出張

廿九日 第三學年は王瀧駒ヶ根兩村へ伐木  
運材事業視察の爲め第一學年は御嶽登山  
の見學旅行に出發、三年は日比野先生、  
一年は田中、杉山兩先生引率

卅一日 見學旅行各地の歡待を受けて無事  
歸校、伊藤先生農業講習の爲東京へ出張

○八月

友 林 蘇 岐

一日 本日より夏季休暇  
 二日 朝鮮大邱農學校長來校視察  
 十日 木曾在郷の二年生登校、苗圃除草  
 農業實習、本日より三日間、福島縣磐城  
 中學校教諭小林鄰氏來校視察  
 廿日 木曾在郷の一年生登校、苗圃除草  
 農業實習、本日より三日間

○會員消息

○渡邊時夫君(十八) 朝鮮平安北道慈城郡  
 舊中營森林保護區へ轉任  
 ○原喜四三君(六) 飯田公有林野官行造林  
 署へ轉勤  
 ○吉田良惠君(十七) 平小林區署在勤被命  
 福島縣石城郡入遠野村大字上根本人遠野  
 保護區官舎詰  
 ○加藤朝太郎君(十二) 栃木縣塩谷郡矢板  
 町第八號矢板保護區官舎へ轉任  
 ○江崎熊太郎君(但職員) 德島縣内務部林  
 業課長に榮轉  
 ○藤原幾喜君(十四) 上田公有林野官行造  
 林署に轉任  
 ○木下旭君(十八) 村松歩兵第三十聯隊第  
 九中隊へ編成替  
 ○山本國久君(八) 舊姓徳武を改姓、茨城  
 縣久慈郡技手、産業技手拜命  
 ○林繁市君(十九) 朝鮮全羅南道光陽郡光

陽面東京帝大演習林に就職

○稻垣阪樹君(十九) 兵庫縣廳土木課に就  
 職  
 ○今井徹郎君(十五) 岐阜縣山林課に就職  
 ○榎山節男君(十五) 岐阜縣益田郡朝日村  
 大字青屋高山出張所官行伐木事業所に轉  
 任

○林友代領收報告

一金參圓也 小松良輔君  
 一金貳圓也 渡邊時夫君

○記念會醴金領收報告

一金拾五圓也 由尾忠助君  
 一金拾圓也 小松良輔君  
 累計金壹千九百四拾四圓也

○塚越先生謝恩金領收報告

一金壹圓也 十桂二郎君  
 一金貳圓也 渡邊時夫君  
 累計金貳拾圓也

◎編輯便り

○殊に激しかつた暑中にあつて諸兄の健在  
 なるを祝します。併せて本校及本會に寄せ  
 られたる諸先生諸校友の御見舞に御禮を申  
 上げます。  
 ○長谷川毅君の長い研究は其終りを告げま  
 したが實は六月號の次に一つ落稿のある事  
 を御通知によりて知りました、之は手元に  
 見當らざりし儘六月分の次に七月分を載せ

て可なりと信じ印刷に附し實に申譯もあり  
 ません、唯今調査中ですが八月號には間に  
 あひません、九月號にて報告致し度いと思  
 ひますから御承知を願ひます。

○右研究は山積せる材料の中より實際の當  
 事者たりしものが統一せるものであつて貴  
 重なる研究であります。特に之のみを要し  
 て林友誌分譲を請はる、向もありました長  
 谷川君は其私信の中に「如何に簡單とする  
 ものれ以上にはなし難く力めて簡單にし極  
 肝要のもののみ採り候も前記の如く相成候  
 (中略)起草當時は例の伐木徵定計畫の真最  
 中の時にて晝は殆ど暇なく僅かに寄宿の狭  
 き一室に夜半まで毎夜約二十日間書き」と  
 告白して居ます。猶、先月號にて集材機作業  
 の所に括弧内に「用具屋の原名を記し置  
 きしに削除に相成實に遺憾千万に存候御承  
 知の如く集材機作業は何處にても原語其儘  
 使用しをり(是は小生は適當なる邦語に直  
 すを可と存候)——中略——唯小生の適切と思  
 ふ意味をとして任意に附し候に過ぎず(下  
 略)誤字あり削除あり林友編輯を輕視しを  
 りし事を恥ぢ深く謝するのであります。

○紙面の都合上折角の御投稿來月廻しのも  
 のがあります。十九字詰に御書きを便とし  
 ますから御承知下さい。姓名は明記の事を  
 願ひます。林友代の件につき先月號参照御  
 含置を願ひます。振替口座は東京一七六〇  
 ○番長野縣木曾山林學校です。

大正十一年八月廿三日印刷  
 大正十一年八月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町五番地  
 編輯兼發行人 安井正夫  
 長野縣松本市小柳町全番地  
 印刷人 淺川吉藏

長野縣松本市小柳町全番地  
 印刷所 淺川活版所  
 長野縣西筑摩郡福島町五番地  
 發行所 蕨澤書店

【定價金參錢】